

自分自身の面 その視点と見方

自分自身の面（ツラ）を直接自分の目で見ることはできない。当たり前の話である。どうしても見たい場合は、①鏡に映った姿を「間接的に」見る。②映像機器を通して撮影した・されたものを媒体を通して「間接的に」見る。が通常考えられるところである。

①に関して：左右逆の姿を見ることになる。光学異性体。何かは検索してみてね。事例豊富につき説明割愛。化学を専門的に勉強された方は、このパラグラフ読み飛ばしてください。釈迦に説法となること相違ない。化学的な何かを生成時、目的の生成物以外に生成される不斉要素。それを生成させない方法を開発したのが野依良治先生（2001年ノーベル化学賞）例えば、その化学的生成物が仮に何かの治療薬とすると、その不斉要素がそれに求められる薬効どころか、毒になる可能性があるということである。また、生体内においても同様にその生体に害となるタンパク質等が論理的には生成されるはずであるが、その遺伝子等が不斉要素を生成しないようにしている仕組みらしいが、定かではない。

つまり、不斉要素に相当する姿を見て、自分の姿だと認識したところで正しい認識とは言えない。しかも、立体ではなく平面である。毒や害ではないが信じることはできない。

②に関して：光の情報が主に電気的信号に一旦変換され、媒体を通してそれを見る。それら信号の通過の間、機材自体が信号を一部欠落させたり、逆に信号を計算上修飾付加している。その上、表示前に人為的に加筆・消去されている場合も事実としてある。撮影機材や表示する媒体の種類等により、元が同じでもその表現は千差万別となりうる。したがって、これも毒や害にはならないにしろ、真の自分の姿ではないことは明らかである。

①②何れも自分の面（ツラ）の虚像に対する印象。つまり、虚像に対する主観に過ぎない。仮に他者の②に対する印象があったとしても、虚像の印象に過ぎないし、直接の印象であっても、あくまで他者の主観であり、何を以って真とするのかは不明である。

もし、その虚像を見てウットリしているようであるなら、錯覚どころか倒錯としか言いようがない（個人の自由）と思う。例えば、素っ裸でケツの穴にロケット花火数十本挿し点火させ、両手うちわでパタパタさせ、案外濃みなく飛行している自分の姿を想像するのと同等の印象と言わざるを得ない。逆に、悲観するなら、全く悲観しなくても良いのではないか？その虚像と大多数他者の面には数多の共通項がある（大差ない）と思うが。

自分の内面はどうか。鏡や映像機器に相当するものは見当たらない。しかし、良く考えると、それに相当する答えの一つが言動となるのではないか。何を語ったか、何をを行ったのかに収斂されるような気がする。慎重とはなるが、飾る必要はない。と思うが・・・

ちょうど時間（行数）となりました。続きは後日にします。ご了承ください。